



第1章 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

木村, 修二 ; 内田, 一徳 ; 増本, 浩子 ; 奥村, 弘 ; 伊藤, 導三 ; 中島, 雄二 ; 石野, 律子 ; 進藤, 輝司 ; 川内, 淳史 ; 井上, 舞 ; 大津留, 厚

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 15(平成28年度事業報告書):1-24

(Issue Date)

2017-03-17

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009774>



第1章

地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

第15回 歴史文化をめぐる地域連携協議会 地域歴史文化をめぐる〈場〉 —つながりを生み出す環境づくり—

はじめに

人文学研究科地域連携センターでは、立ち上げ当初から、各年度の終わりにあたり、その年の諸活動を総括する意味から、歴史文化をめぐる地域連携協議会を開催してきた。この協議会では、兵庫県内を中心に、自治体職員や大学関係者、地域活動を行っている市民グループ関係者などに呼びかけ、地域歴史遺産の保全や活用などをめぐり、毎年テーマを決めて議論している。15回目となる今回は、瀧川記念学術交流会館2階大会議室を会場に、「地域歴史文化をめぐる〈場〉—つながりを生み出す環境づくり—」というテーマをたて、人文学研究科および当センターが主催、兵庫県教育委員会およびCOC+ひょうご神戸プラットフォーム協議会、科学研究費基盤研究S「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立——東日本大震災を踏まえて」研究グループ（研究代表者・奥村弘）の共催として開催した。

今年度のテーマの趣旨については、後述の木村修二による「問題の所在」(8頁)に譲ることとし、ここでは当日の進行の状況などを報告する。なお、各報告は報告者執筆による要旨、冒頭の挨拶および質疑応答は、当日の音声採録を後掲するので、そちらを参照していただきたい。

まず、会の冒頭では、内田一徳・本学理事／副学長より開会の挨拶があり、続いて増本浩子・人文学研究科長／地域連携センター長より主催者挨拶、さらに奥村弘・地域連携推進室長より協議会的主旨説明があった。

午前中に行われた第1部の活動報告では、伊藤導三氏（氷上古文書同好会代表世話人）による「氷上古文書同好会の活動の経緯—結成から区有文書目録の完成まで—」、および中島雄二氏（朝来市役所生野支所地域振興課参事／生野書院副館長）による「歴史遺産を活かしたまちづくり—生野公民館の事業から—」の2報告がなされ、報告後には質疑応答がなされた。

昼休憩の時間には、同会館1階ロビーにおいて、参加者交流会を兼ねた兵庫県内各地諸団体の活動紹介や刊行物展示会が行われた。

午後からの第2部協議会では、まず木村修二（本学大学院人文学研究科特命講師／COC+「歴史と文化」領域コーディネーター）による本協議会のテーマへ寄せた問題提起の後、石野律子氏（神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員／地域史料保全有志の会副代表）による「村が経糸、会が緯糸となって織り成す栄村歴史文化館」、進藤輝司氏（三木古文書研究会会員）による「襖下張り文書の解説と市史編さんボランティア」と川内淳史（本学大学院人文学研究科特命講師）による関連コメント「自治体史編さんという〈場〉—三木市における地域活動と歴史文化—」、井上舞（本学大学院人文学研究科研究員）による「生野書院という〈場〉での古文書整理」、大津留厚（本学大学院人文学研究科教授）による「青野原俘虜収容所研究と地域社会—15年目の総括—」という報

告がそれぞれ行われた。

休憩を挟んで全体討論が行われた。詳細は別掲に譲るが、ここでは地域歴史をめぐる文化活動が社会教育施設などの空間としての〈場〉において、地域活動を担う人々の集まりによって展開している状況が確認される一方、古文書整理や解読などの作業に地域住民が携わることに對して無報酬のボランティアか報酬の支払いを伴うべきかなどの問題などがフロアから提起されるなど、活発な議論が交わされた。

協議会の後には情報交換会が開かれ、リラックスした雰囲気の中での交流がみられた。

参加者は、49 団体 99 名。参加者アンケートによる感想では、各報告によって各地で出発点は異なっているにもかかわらずさまざまな努力・工夫・苦勞をし、それぞれが個性的な〈場〉を構築していることがわかったという意見を中心に、「〈場〉をつくること、活かすこと、そのための具体的なスキルや考え方を改めて学ぶことができた」（史料館職員）や「(今回の構成が) 大学・自治体職員・市民の三者からそれぞれの立場の報告を聞いて、バランスのよい配置になっている」（大学教員）といった高評価をいただいた一方、「アカデミーとしての大学が〈研究のオートノミー〉として十分に機能してきているかどうかが見られない」（博物館職員）といった厳しい意見もあった。大学への要望としては、「旅費等の問題もあるが、各地の〈場〉に参加している地域の方にも出席して欲しい」（地域団体関係者）や、「大字誌編纂の専門的な部分にホットラインとしてアドバイスが欲しい」（地域学習グループ関係者）、「いろんなグループの取り組みの内容や過程についての意見交換の場があればいい」（自治体職員）といった意見がみられた。

当日配布した図版データは本報告書には掲載していないが、神戸大学学術成果レポジトリ (http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel) を参照していただきたい（「第 15 回歴史文化 予稿集」で検索）。

なお司会進行は、木村修二（人文学研究科特命講師）と前田結城（人文学研究科学術研究員）が

務めた。

（文責・木村修二）

プログラム

11:00 ～ 11:05 開会挨拶

内田一徳（神戸大学理事／副学長）

11:05 ～ 11:10 主催者挨拶

増本浩子（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター長）

11:10 ～ 11:20 趣旨説明

奥村弘（神戸大学地域連携推進室室長）

第 1 部 活動報告 11:20 ～ 12:10

11:20 ～ 11:40 活動報告①

伊藤導三氏（氷上古文書同好会代表世話人）

「氷上古文書同好会の活動の経緯—結成から区有文書目録の完成まで—」

11:40 ～ 12:00 活動報告②

中島雄二氏（朝来市生野支所地域振興課参事・生野書院副館長）

「歴史遺産を活かしたまちづくり—生野公民館の事業から—」

12:00 ～ 12:10 質疑応答

12:10 ～ 13:10 昼食・交流会

第 2 部 協議会 13:30 ～ 15:40

13:10 ～ 13:20 問題提起

木村修二（神戸大学大学院人文学研究科特命講師）

「地域連携協議会に向けての論点整理と課題」

13:20 ～ 14:00 報告①

石野律子氏（神奈川大学日本常民文化研究所／地域史料保全有志の会副代表）

「村が経系、会が緯系となって織り成す栄村歴史文化館」

14:00 ～ 14:20 報告②

進藤輝司氏（三木古文書研究会）

「襖下張り文書の解説と市史編さんボランティア」

14:20～14:30 関連コメント

川内淳史（神戸大学大学院人文学研究科特命講師）

「自治体史編さんという〈場〉—三木市における地域活動と歴史文化—」

14:00～14:20 報告③

井上舞（三木古文書研究会）

「襖下貼り文書の解説と市史編さんボランティア」

14:20～14:30 報告④

大津留厚（神戸大学大学院人文学研究科教授）

「青野原俘虜収容所研究と地域社会—15年目の総括—」

15:40～16:00 休憩・交流会

16:00～17:15 全体討論

開会挨拶

内田一徳
神戸大学理事／副学長

みなさん、おはようございます。第15回歴史文化をめぐる地域連携協議会の開会にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。本日はご多忙のところ本協議会において下さいまして、まことにありがとうございます。神戸大学では大学の地域貢献事業の一環として2002年11月に人文学研究科に地域連携センターを設置いたしました。それ以来、当センターでは歴史文化や地域歴史遺産の保全・活用を目的とする自治体や住民団体との連携事業を進めてまいりました。以後、本学では農学研究科・保健学研究科に地域連携センターを設置し、広い分野にわたって地域連携事業を展開してまいりました。各事業をご支援いただい

ります皆様に篤くお礼申し上げたいと思います。

さて、人文学研究科地域連携センターでは、各年度の終わりに一年の活動を集約する意味を含めて、県内の自治体職員・市民団体代表者・大学関係者の方々に一堂に会していただき、地域の歴史文化を巡って議論するための協議会をこれまで14回開催してまいりました。今年度の協議会では、「地域歴史文化をめぐる〈場〉—つながりを生み出す環境づくり—」というタイトルをつけさせていただきました。当センターでは発足以来、さまざまな地域活動に携わる中で、多様な立場の人々やグループが歴史文化を活かした地域づくりを展開する〈場〉の重要性を認識するようになってきました。〈場〉という言葉には、空間的な〈場〉という意味とそこから人々のつながりや関係が生まれて形成された公共的な〈場〉・コミュニティーとしての〈場〉という二重の意味合いが含まれております。本来、人々のつながりや関係としての〈場〉は、公民館のような施設があることで活動が促進・維持される面があります。他方で、空間的な〈場〉としての施設もそれは単なる「ハコモノ」に陥らないためには、さまざまなグループがそこを拠点に持続的に活動し、またそれを可能とする運営が行われていることが重要です。空間としての〈場〉と人々のつながりとしての〈場〉は重層的に存在しており、この両輪があつてこそ大きな効果を発揮すると考えられます。なお、地域における教育研究拠点としての性格を持つ大学も、このような二重の〈場〉としての役割を今求められております。大学は知の拠点として地域の方々と持続的に研究を進め、新しい世代を育成する場としての意義を果たすようになってきています。

神戸大学におきましても平成27年度文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」、いわゆるCOC+事業に本学を中心とする「地域創生に應える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム事業」が採択されました。これも歴史文化だけでなく自然と環境などさまざまな領域で〈場〉、つまり、プラットフォームの強化を目指す事業として大学一体となって取り組んでおります。

さて、この度冒頭で述べました「地域歴史文化をめぐる〈場〉」というタイトルのもと大学を含めたさまざまな人々やグループが歴史文化を核として協働する〈場〉を構築することで、地域づくりを実践しておられる方々から貴重なご報告をいただけることになり、まことに感謝に堪えません。今回の協議会を通じて、歴史文化を活かした地域協働の〈場〉のありかたをめぐり、ご参加いただいた皆様とともに包括的に話し合えることを願っております。なお、本協議会はさきほど述べましたCOC+事業「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム事業」の一環としても行います。ここでの議論が地域の課題解決につながっていけば幸いに存じます。

最後になりましたが、本協議会を共催していただきました兵庫県教育委員会をはじめご協力いただきました多くの関係者の皆様に対しまして、神戸大学を代表して深く感謝申し上げます。この協議会が実り多いものになりますことを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

主催者挨拶

増本浩子

神戸大学大学院人文学研究科長
／地域連携センター長

おはようございます。人文学研究科長の増本と申します。地域連携協議会によろそお越し下さいました。おかげさまでこの協議会も今回で15回目を迎えることができました。いつも地域連携センターの活動を支援してくださっている皆様に改めてお礼申し上げます。今年の協議会のテーマは、「地域歴史文化をめぐる〈場〉—つながりを生み出す環境づくり—」です。テーマの趣旨を大きく捉えると、文化を育む人々のつながりを生み出す〈場〉、そのような〈場〉をどのようにしてつくっていくのか。そして、そのような〈場〉をどのような人々の関係でつくっていくのか、とい

うことが問われていると思います。このように考えた時、大学も本来的にこのような〈場〉であるべきだということに思いあたります。言うまでもなく、大学の使命は人々が幸せで豊かな生活を送ることのできる社会を実現するために、さまざまな研究や教育を行うことにあります。そう考えると、大学が社会に向かって開かれているのは当然のことであり、また大学が文化を育む人々のつながる〈場〉であることも自然なことです。しかし、残念ながらいわゆる1968年の「革命」以降、日本の大学がそのような大学の使命について真剣に考えるようになったのは、ごく最近のことです。大学改革の名の下に、教育・研究の条件が悪化しはじめたとき、大学で働くものにとってショックだったのは、社会の中から大きな反論が上がってこないということ。つまり、社会が大学のことをあまり重要だとは考えていないのではないか、ということでした。このような事態に至った大きな理由の一つは恐らく、私たち大学人が大学というものがそもそも人々のつながる〈場〉であることを自覚してこなかった、そういう〈場〉として社会との関係を築いてこなかったことだと思います。

近代的大学の基本構想をつくったのは、19世紀の初頭にドイツで大学改革を行ったヴィルヘルム・フォン・フンボルトですが、彼は大学の「孤独と自由」(“Einsamkeit und Freiheit”)ということを行いました。つまり、大学は自己の活動に責任を持ち、社会や国家など大学の外部からの干渉を受けるべきではない、と主張したのです。大学での教育・研究に国がとやかく口出しすべきではない、というのは今でも全くその通りでしょう。ただし、フンボルトは大学が社会から切り離された存在となることを理想としたのではなく、最終的には学問を社会的実践に結びつけて考えていました。今の私たちが立ち帰るべきなのは、恐らくこの点だと思います。

今日は地域歴史文化をめぐるさまざまな活動の〈場〉について意欲的な取り組みが紹介されることと思います。それに学びながら神戸大学人文学

研究科もそのような〈場〉の一つとして、また今日のようにさまざまな〈場〉をつなぐ〈場〉として一層開かれ、社会にとって有意義な存在になるよう努力していきたいと考えています。今日の議論がそのような営みを前身させるエネルギーになることを祈念してご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

主旨説明

奥村 弘

神戸大学地域連携推進室長

人文学研究科地域連携センター副センター長

皆様、お久しぶりでございます。毎日会っている方もおられますけれども、また来ていただきましてありがとうございます。神戸大学の地域連携推進室長とそれから人文学研究科のセンターの事業責任者をしております奥村でございます。今日は私のほうから、先ほどから COC+ など耳慣れない言葉が出てきておりますが、初めてご参加いただいた方もおられると思いますので、少しこの協議会の位置づけを皆様に説明しておきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

神戸大学の地域連携というのは、地域連携推進室という学内をつなぐ組織を中心にしまして、地域連携センターを持つ人文と保健と農学、それに都市安全研究センター等とさまざまな学内の諸部局・諸機関と連携しながら活動を進めています。三つあるセンターは、とても重要でそれぞれの専門に合わせて分野において地域の方々といろんな形でつながりを持っておりまして、ちょうどこの一週間くらいにそれぞれ協議会をやっております。農学は篠山で保健は昨日行われました。それぞれの部局には特色があります。ここの地域連携協議会の一番の特色は、たくさんの地域から多くの方に参加していただいていることです。先ほどのご挨拶でも触れられていましたが、現在大学の中では、「専門知」と社会の中のいろんな知恵というのを合わせて多様な社会の結節点をどのよ

うにつくっていくのかを求められています。実はこのセンターが15年間やってきた活動というのは、この問題を考えるに際して大変重要なヒントとなっています。そして、地域連携センターでやってきたことを、もっと広く、もっと多様な私たちで兵庫県を〈場〉にしながら進めていこうというのがCOC+ということになります。人文学研究科の地域連携センターの中で協議会の位置づけは、地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進、という課題にあたるものです。私自身の経験で言えば、阪神淡路大震災の時にはさまざまな地域歴史遺産の保存をさせていただきましたけれども、その時に地元の方の協力なしには進められませんでした。基本的には、地元で地域歴史文化が盛んでないと、歴史は重要視されないという痛い経験もしました。それをめぐってなによりも大事なことは、関係している皆様が知り合うことで、なによりも交流を大事にしよう、ということで15年間この協議会を続けてきています。その中でそれぞれの時に重要な課題を議論してきました。またCOC+にあたっては大学を越えて園田学園大学とともに民俗学を中心に新しい課題にも取り組んでいます。また、神戸新聞社とも連携しています。この大きなプロジェクトの中でも歴史文化が軸となっています。また、こういった中で県内の自治体職員として歴史文化を考えていきたいという大学院生も増えてきてまして、今年は修士を修了して朝来市に就職することになった人もいます。

皆様のところに、15回目の地域連携協議会の予稿集があると思いますが、第一部は「活動報告」としまして、兵庫県内の各地域で取り組まれているユニークな取り組みを紹介させていただいて、それをお互いに学び合おうという形で進めたいと思います。今回は氷上古文書同好会と朝来市の生野支所からの活動紹介になります。第二部は「地域歴史文化をめぐる〈場〉一つなかりを生み出す環境づくり」というテーマのもと、長野県栄村の事例を石野律子さんに、市史編纂事業で提携している三木市からは進藤輝司さんに報告をお願い

しております。そして、地域連携センターとともに長い活動を展開してきました、生野書院について井上舞さん、青野原俘虜収容所について大津留厚さんから報告をしていただきます。

以上のように前半はさまざま活動に学び、後半は持続的な活動の経験を学びながら交流を深めていくということで一日過ごしていきたいと思います。非常に長丁場ですが、最後までよろしくお願い申し上げます。

第1部 活動報告①

氷上古文書同好会の活動の経緯

—結成から区有文書目録の完成まで—

伊藤 導三
氷上古文書同好会

氷上区で取り組んできた区有文書の整理と目録作成の取組を報告します。区有文書の整理は区内の有志が「氷上の歴史をまとめてみよう」ということで平成26年5月からはじめた。

茶封筒に文書を一枚ずつ入れて、外側に年代を書いて整理した。平成27年11月から神戸大学の支援を受けて目録作成に取り組んだ。

目録作成は、二人一組になり目録表をつくった。難解な作業だったが、文字の輪郭をなぞり、想像性を働かせる作業で、脳の活性化にもなり、クリエイティブな作業の体験だった。毎回の勉強会もあり、参加した区民も充実した時間を過ごせた。そんな噂が伝わり参加者が増えていった。目録整理が終わり、文書に番号札を貼付して作業を終えた。11月に記念事業として古文書展示、区内探索、目録贈呈式、記念講演会をもった。目録が冊子になったことは色んな意味で意義深かった。今後は、価値観が多様化する中で、気軽な気持ちで参加できる仕組みづくりを考えていきたい。

第1部 活動報告②

歴史遺産を活かしたまちづくり

—生野公民館の事業から—

中島 雄二
朝来市役所生野支所地域振興課

はじめに

生野銀山は、大同2年(807)に開坑したとの言い伝えがあるが、本格的に採掘が始まったのは天文14年(1542)からで、戦国時代において織田氏・豊臣氏の財政基盤を支えてきた。江戸時代には生野銀山を管轄した陣屋が設置され、前期には銀を産出した最上級の天領鉱山であり、中期以降は銅や錫を多く産出していた。陣屋を中心に銀山町には郷宿が存在し、これらの旧家に多くの史料が残されており、それらをもとに生野銀山史談会による郷土史の研究が盛んであった。

生野町は合併した他の3町に比して、少子高齢化の進行が顕著で、高齢化率が40%に迫っている。必然的に研究者も高齢化し、それに続く人材も育ってきていない。また、現在も個人が所有・管理されている史料は、所有者の高齢化や承継者の不足により、適切に保管・管理が難しくなっている。地域における歴史遺産の継承は、地域住民の理解と協力が不可欠である。

1. 神戸大学との連携

さきに述べた状況のもと、合併前の生野町は平成16年(2004)に神戸大学地域連携センターとの連携した共同研究を行うことになった。これは、古文書を活用したまちづくりを探るために締結されたものである。この連携によって、平成18年1月から3月に神戸大学から講師の派遣を受けて初心者向けの古文書講座が開催された。その後、参加者を中心に、平成18年4月に生野古文書教室が設立され、独自に町内の古文書の翻刻や読み下しを行い、その成果を本にまとめるなど、精力的に活動されている。また、神西郡森垣村に存在し今ものこる石川家から、約10,000点に上る資

料が見つかり、平成 21 年度には市民と共同で整理作業が行われ、現在も継続している。

2. 石川家とは

石川家は播磨龍野を本貫地とし、18 世紀後半に薬種商として姫路から生野に移住しているようで、その後農業を主に酒造業、林業のほか、宿屋など多角的経営を行なって成長していったと考えられる。また、掛屋・山師と縁戚関係を結び、鉾山経営を支えていた。

石川家は初代布堯、2 代長英、3 代両中、4 代魚連^{なつら}と続くが、彼らによって多くの歴史遺産がのこされている。そのうち、長英の代、文政 9 年(1826) から約 60 年間にわたって記されている日記は、当時の世相を窺い知るうえで貴重である。ほかに村役人を務めていたときの村方文書や、鉾山経営にかかる文書などがのこされている。また、豊富な資金を元に美術品を集めるなど、文化教養を兼ね備えており、特に長英は「雀翁」という名で画を描き、「安登里^{あとり}」という名で歌を詠んでいる。

3. 石川家文書を活かした取り組み

石川家文書のうち、未整理のものは神戸大学との連携事業の一環として地域の住民と整理作業を行った。また、内容が判明したもののなかに、幕末に但馬で青谿書院を開いた池田草庵をもてなした記録がのこっており、これを活かして公民館講座と生野高校との連携事業を実施した。

4. 池田草庵

池田草庵(1813～1878)は養父市八鹿町宿南に生まれ、京都で儒学を学んだのち、郷里で私塾「青谿書院」を開いた。門人は全国から約 700 人、門下生には京都府知事を務め、琵琶湖疏水を完成させた北垣国道(晋太郎)や、明治・大正期の金融業、鉄道事業等の発展に寄与した原六郎(進藤俊三郎)らがいる。

5. 公民館講座

平成 28 年度、公民館の特別講座として生野歴

史文化講座を開講して実施した。

(1) 歴史講座

生野書院館長が講師となって、幕末の生野の状況について解説を行った。

(2) まち歩き教室

町並みガイドの案内で、生野にのこる銀山町に係る歴史遺産をたどった。

(3) 創作教室

公民館講座で絵手紙教室の講師の指導で、献立をかいいたミニ屏風づくりを行った。

(4) 古文書講座

神戸大学から講師の派遣を受け、石川家にのこる「池田先生様逗留中御献立扣」をテキストにした初心者向けの講座を行った。

(5) 料理教室

「池田先生様逗留中御献立扣」のなかから献立を 3 点抽出した。この文書は、慶応 2 年(1866) 3 月 3 日～14 日まで、生野代官所最後の代官である横田新之丞が池田草庵を生野に招いた際、接待役を石川家に命じた記録で、ほかに用意した調度品・什器の記録ものこっている。この献立のなかから選んだのが、とうふめし(3 月 12 日夕食)・木の芽あえ(3 月 3 日夕食)・鯛の吸い物(3 月 7 日夕食)で、かつて町内のレストランシェフを務めていた方に講師を依頼し、料理の復元を行った。

6. 生野高校との連携

生野高校家庭科部で「天領・生野 復活の架け橋プロジェクト」を立ち上げ、先に述べた献立のなかから、カステラ(か寿てらく 3 月 3 日夕食)を選び、幕末につくられた献立を復元した。講師は公民館講座の料理教室の講師にお願いし、高校生がパッケージも含めて製作し、町内のイベントで販売したところ、大好評であった。これに続く第 2 弾として、とうふめしをアレンジし、朝来市ブランド野菜である「岩津ねぎ」入りを考案するなど、今後の展開が期待される。若年層と地域のつながりを図るうえで、重要な取り組みである。

おわりに

これまで述べたように、さまざまな講座を開催することで、興味を持つ人の掘り起しに寄与することができ、地域にのこる歴史遺産の重要性を再認識できた。また、地域の歴史を学ぶ高校生をはじめとした若年層に関心を持たせることができた。

今後は、地域にのこる古文書の整理作業を継続して地域の住民の手で行い、地域の歴史遺産の継承を図っていきたいと考えている。また、学校との連携を図り、高校生をはじめとした若年層への興味と関心をもたせ、地域の活性化に寄与していけるよう、検討を重ねていきたい。

第2部 問題の所在

地域連携協議会に向けての論点整理と課題

木村 修二

神戸大学大学院人文学研究科

今回の協議会のテーマは、「地域歴史文化をめぐる〈場〉—つながりを生み出す環境づくり—」とした。

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター（以下、「当センター」）は、2002年の発足以来、さまざまな地域活動に携わることを通して、多様な立場の人・グループが歴史文化を活かした地域づくりを展開する〈場〉の重要性を認識してきた。

〈場〉にはいくつかの局面が想定できるが、まず空間としての〈場〉が重要である。これは〈所〉と結びついて〈場・所〉として認知される。具体的には「施設」を想起すればよいが、たとえば公民館（生涯学習センター・社会福祉センター）や図書館、博物館など公立の社会教育施設が挙げられ、これらは貸室をすることで非営利活動への利用提供を行っている。また、各地区に存在する「公民館」や公会堂など住民団体の集会施設も、日常的には当該地区の寄合や祭礼などに利用されるが上記のような活動にも提供されることがあろう。当センターと関わりのある施設としては、三

木市の旧玉置家住宅や今年度はじめにオープンしたみき歴史資料館、朝来市の生野書院、尼崎市立地域研究史料館、明石市立文化博物館、福崎町立柳田國男・松岡家記念館、神戸市文書館、小野市立好古館などは公立の施設の例であり、丹波市春日町の棚原公民館や同市氷上郡氷上公民館、神戸市東灘区の一般財団法人住吉学園が運営する住吉歴史資料館、姫路市香寺町の犬飼公民館、神戸市東灘区の深江地区が運営する神戸深江生活文化史料館などは住民団体の施設である。さらに、カルチャーセンターなど民間教育事業者が運営する施設も、空間としての〈場〉の要件を満たしていると考えられる。

一方で〈場〉には、人々のつながり・関係性としての意義も含んでいると考えられる。これは古来、「庭」という言葉でも表される意義といえるが、たとえば、自治会や財産区管理会など、伝統的・歴史的団体で、「共同体」とも言い替えられうる地域的なコミュニティや、同好会のような特定の活動を目的とするグループ（テーマ・コミュニティ）がある。

人々のつながりとしての〈場〉もたとえば公民館のような空間があることで、活動が促進され、また維持される面がある一方、空間としての〈場〉である施設なども、さまざまなグループがそこを拠点として活動することを積極的に受け入れ、それを可能とする運営がなされていることが重要といえる。つまり、空間としての〈場〉と人々のつながり・関係性として〈場〉は、密接に結合することで、それぞれのメリットをより発揮できるものと考えられる。

また今日、当センターを含む「大学」という立場も、上記のような二重の〈場〉としての役割を求められてきているが、①人材育成の〈場〉（＝教育）、②知の「開発」と蓄積（＝研究）、③マンパワー（人材の供給）（＝臨床）という大学が持つ3つの目的を、地域づくりなどの実践に活かし、また地域の人々と一緒になって進めることで、地域における〈知〉の拠点としての大学の存在意義を高めることができよう。

当センターが進めている地域歴史文化をめぐる地域連携事業は、人文系としてはまことに珍しい「実践」の〈場〉といえる。地域連携事業に携わる当センターのスタッフは、居住地においては一人の地域住民としての立場にあるが、一方で研究員として地域に入り地域活動に関わろうとするときの立ち位置は、あくまで「よそのもの」としての立場にほかならない。しかし、今回のような協議会の主催をすることでさまざまな地域の多様な立場・グループを結びつける〈場〉を構築したり、機関誌『LINK』のようなメディアを通してより広く情報を発信することも可能となるように、「よそのもの」だからこそ果たせる役割があると考えている。

一方で、今回ご報告いただく長野県栄村の「こらっせ」をめぐる様々な活動や三木市の「三木古文書研究会」、朝来市生野書院を舞台にした様々な活動をみると、さまざまな〈場〉において活躍するコーディネーター的立場の重要性も明らかとなってくる。これらの活動実践を通して、コーディネーター的立場の要件が明らかとなる。すなわち、誰でも気軽に受け入れる寛容さを持ち、また参加するメンバーの志向や能力などを鑑みながら的確に活動内容の分担をはかっていく能力を持ち、さらに活動の継続の鍵となるベテランとニューフェースとの融合および若年層を積極的に取り込む努力をするといったことが挙げられる。それぞれの〈場〉では、活動が続ける中で、さまざまな「失敗（つまづき）」を内包してきたと思われるが、それにどう対処し、今日まで活動を継続させてきたか、そうした実践報告は、それぞれの地域で抱えている様々な課題を克服するためこれから何らかの活動を進めようと考えている人にとってはとても貴重な示唆ともなるに違いない。

当センターでは、本協議会を通じて、歴史文化を活かした地域協働の〈場〉のあり方をめぐり、包括的に話し合いたいと考えており、この協議会自体が多く参加者の間で新たなつながりが生み出される〈場〉となることを願っている。

第2部 報告①

村が経糸、会が緯糸となって織り成す栄村歴史文化館

石野 律子
地域史料保全有志の会

はじめに

2011年3月12日に長野県北部地震で被災してから5年半となる2016年8月に「こらっせ」という栄村公民館と栄村歴史文化館が合体した文化施設がオープンした。文化財レスキューから6年目で新たな活動の展開に入ったことは、私たち会のメンバーにとって驚きであったが、改めて客観的に活動を振り返ってみると、栄村の場合は色々な要素や条件が奇跡的に組み合わせあって、今回の協議会テーマのキーワードである〈場〉が形になったと考えている。

この報告では地織の織物で経糸を栄村、緯糸を地域史料保全有志の会に例えてご報告したい。

1. 「経糸としての栄村」 その意味

経糸1

栄村が独自で歴史文化を残そうとしていた痕跡があったこと

例えば、昭和40年代に民具調査をアンケート形式で実施し、同時に民具収集、民具の聞き取り調査や写真やスケッチで記録、報告書を発刊した。民具の収集は平成13年ごろまで継続、それらを廃校の小学校で保管。ほかにも当時その調査に関わった郷土史家が考古・歴史・民俗の分野で調査記録した資料も残されていた。

経糸2

古文書班が地震前から村の史料調査に入っていた実績と成果

白水智氏率いる古文書班が村を調査していたほか、栄村教育委員会の委託調査では廣瀬博明家の土蔵調査をして土蔵内部の詳細な民具現状記録や写真を残し、史料整理もして村の信用を得ていた。この現状記録資料によって土蔵内部の復元展示が可能となった。

経糸3

栄村の厳しい自然環境と豊かな自然

豪雪地帯といわれる栄村は半年を雪と暮らす生活。冬場は農作業もないので時間的な余裕ができる。そこで民具収蔵棚や古文書収納棚製作は農閑期を待って村民に託した。設計から組み立てまで特に民具収蔵棚に関しては全て村民の手によるものである。またすぐにモノを入手できない環境によって、村民は知恵や工夫でその場を乗り切ろうとするパワーがあった。一方で民具の材料になる木や草などの種類が豊富で、人・技術・材料の三拍子が揃っていた。

経糸4

排他的でなく誰でも受け入れ、大らかさのある村民気質

日常的に共助で成し遂げる場が多い栄村。気の合う仲間で手際よく作業することができる。また相手を思いやる優しさがあり、ポジティブな考え方を持つ。

経糸5

廃校になっていた旧東部小学校志久見分校の存在

古い小学校の建物を村が再利用していたので、文化財レスキューした資料などを保管し、整理作業する空間が残されていた。

2. 「緯糸としての会」その意味

緯糸1

会の参加条件はないので専門分野・職種や年齢が幅広く多彩

考古・歴史・民俗民具以外の分野の方も多数参加しているので、異分野の方との交流ができた。参加者の豊富な経験や知識から、活動内容や企画展示のアイデアや方法が見つかり、チーム力によって乗り越えることができた。

緯糸2

都合の良い日程だけ参加し、考古・古文書史料・民具調査のいずれかを自由選択するが、調査内容は共有する。

活動期間中は、古文書史料・民具班の両リーダーが必ず揃って参加している。考古班は不定期

で活動。古文書班と同じ場所で行うので、民具調査で出てきた反故紙などは史料として別に扱っている。館のオープンに向けた展示活動においては、展示に慣れた学芸員が月替わりで応援に駆けつけた。民具復元には村民の協力をお願いしチェックしてもらった。

緯糸3

継続は力なり。「栄村時間」を楽しむ心の余裕を持つ活動

活動は初年度からほぼ毎月、年に10回、年間40日以上。間を開けないで継続して活動することによって、史料や民具整理も進み、被災地を勇気づけることに繋がる。また「屋内で資料整理ばかりしないで、外に出て村の自然をもっと知って欲しい。」という地元女性の言葉を受け、2年目からは村歩きや体験の活動を加え、さらに小学生対応の文化財教育にも力を入れた。結果的に民具展示解説の内容に反映することができた。

緯糸4

毎回の活動報告書の作成

活動内容の発信や次回活動へのメモ代わりとして写真と文でまとめ、会のブログ上で発行している。2016年12月活動(第56号)までが発行済。

緯糸5

夢物語を常に語れる場所があったこと

活動一年目から、志久見にあった廃校の小学校にこだわっていた。ライフラインが何もない最悪の建物ではあったが、そこを会の活動拠点として使わせてもらっていた。村のために何ができるか、初年度から5年10年後を見据え、夢の実現には何をすれば良いのか話し合っていた。

終わりに

今は、私たちの予想をはるかに超える手応えで、村が独自に施設運営や内容を考えるようになった。しかしそれは私たちの会がキッカケを作っただけで、村には以前から「文化を残し継承させたい」という土壌があったからだと考えている。今後も私たちの会と村との協働は続き、これからも〈場〉としての布が織られていくことだろう。

第2部 報告②

襖下張り文書の解説と市史編さんボランティア

進藤 輝司
三木古文書研究会

平成16年（2004）5月に発足した「三木古文書研究会」の活動報告をさせていただきます。

この研究会の目的は、古文書の解説を通じて市民文化の向上に貢献することを掲げ、その事業の一つとして、三木市及び公共的な事業に参加する項目を入れ、月2回、三木市立中央図書館で例会を開き古文書の解説に励んでいます。会員は二十数名です。

現在、公共的な事業に取り組んでいるのは次のとおりです。

- ①三木市本町2丁目の「旧玉置家住宅」（国登録有形文化財）で、襖下張り文書の解説と目録づくりに月2回、1回につき3時間行っています。
- ②その「旧玉置家住宅」で、月1回主として初心者を対象に「三木古文書塾」（2時間）が三木市観光協会主催で開催され、その講師に5名の会員を派遣しています。
- ③「兵庫歴史研究会」主催の「古文書教室」（神戸市中央区の兵庫県民会館）に月1回その講師として2名派遣しています。
- ④平成28年4月、三木市教育委員会が古文書の解説と目録の作成などに協力できる「三木市史編さんボランティア」の募集に対し、十数名の会員が応募し、同年6月から江戸時代の古文書や明治・大正・昭和の文書の解説や目録づくりに毎週1回、1回につき3時間のボランティア活動に取り組んでいます。

第2部 コメント

自治体史編さんという〈場〉

—三木市における地域活動と歴史文化—

川内 淳史
神戸大学大学院人文学研究科

進藤報告を受け、現在、人文学研究科と三木市との連携で進められている「新三木市史編さん事業」の経緯および概要を述べるとともに、三木市における住民主体の地域歴史文化に関わる活動が、これまでいかなる〈場〉を形成し、またその動きを受ける形で展開される市史編さん事業がいかなる〈場〉を形成している（あるいは形成していきたいと考えている）かについてコメントしたい。

1. 新三木市史編さん事業について

大学と市の連携による新市史編さん事業は、2013年に締結された包括連携協定を受けて、市制60周年を迎えた2014年よりスタートされた。2014年4月に三木市は「受託型協力研究」として市史編さん事業を開始し、神戸大学からは教員1名を派遣、さらに2015年に市史編さん事業の主管が企画総務部総務課から教育委員会文化スポーツ振興課に移管されるにおよび、市教委と大学とによる市史編さんの事務局が組織された。2016年度には市史編さん委員会および通史編・地域編の2つの専門委員会を発足させ、本格的に事業を遂行する体制を整えた。

新市史編さん事業では「通史編」と「地域編」の2本柱での編さん事業を計画している。このうち「通史編」については神戸大学を中心とした大学研究者が中心となる時代別・分野別部会を組織し、学術的水準の高い市史を編さんすることをねらいとしている。一方「地域編」では市内公民館区ごとに地域部会を組織し、地域住民が調査研究から執筆までの中心を担いつつ、住民の観点からの自治体史編さんを企図するものである。これらを総合し、研究者のみならず住民自身が自治体

史編さんの過程に関わっていくことにより、編さん事業そのものを「まちづくり」の一環として位置づけようというのが大きなコンセプトのひとつとなっている。

2. 歴史文化に関わる三木市民の活動と行政・大学

以上のような市史編さんを行っていく上で、これまで三木市で展開されてきた歴史文化に関わる地域活動が重要な意味を持つ。今日の三木市における住民主体の地域活動の原点として位置づけられるのが、進藤報告で述べられた「三木郷土史の会」の活動である。2004年にその活動に幕を閉じた同会であるが、三木の地域史研究の進展に寄与するばかりでなく、同会主催の事業として1983年にスタートした「古文書を読む会」が、同会解散後、現在に至るまで「三木古文書研究会」として継続されていることは、地域における歴史文化の担い手を養成し、活動を持続させる〈場〉として大きな意味を持った。

こうした郷土史の会—古文書研究会が維持・継続してきた三木における歴史文化の〈場〉をさらに発展させた活動が、旧玉置家住宅における襖下張り剥離・解説作業であったと考える。2010年3月に結成された市民グループ「旧玉置家文書保存会」は、三木市高齢者大学大学院修了者と古文書研究会のメンバーを中心に設立され、三木市商工観光課や三木市観光協会の運営サポートを受けつつ、国登録有形文化財である「旧玉置家住宅」において玉置家およびその他市内旧家に残された襖の下張りとして眠る地域史料を掘り起こす活動を続けている。同会の活動には技術指導として文化財修復家の尾立和則氏が関わり、また人文学研究科地域連携センターが活動協力を行っている。旧玉置家住宅におけるこうした活動は、これまで三木市で行われてきた住民主体の地域歴史文化活動を、行政・大学・専門家が関与することでさらに発展させ、より大きな〈場〉として構築される過程であった。さらに活動場所である旧玉置家住宅では、保存会の活動を契機に、神戸大学古文書

合宿が毎年開催されたり、また古文書研究会の新たな試みとして「三木古文書塾」が展開されるなど、三木の歴史文化を創り出す空間としての〈場〉にもなっていたことは特筆すべきことである。人のつながりの〈場〉が空間としての〈場〉を生み出し、さらにその空間が人のつながりをさらに広げる事例であるといえよう。

市史編さん事業開始後に組織された「市史編さんボランティア」も、上記のような活動の延長線上にあるものである。2016年5月に開館した「三木市立みき歴史資料館」にある市史編さん整理室において活動する市史編さんボランティアには、これまで旧玉置家住宅でも活動してきた担い手が参加すると同時に、市史編さん事業に興味・関心をもつ新たな担い手が参加しており、参加者は三木市内にとどまらない。また、市史編さん事業の一環として2016年10月に三木市立みき歴史資料館講座として実施した古文書入門講座「はじめてのくずし字」では、初めてくずし字に触れる多くの参加者を得た。参加者の中には、この講座をきっかけに三木古文書塾への参加を行っている事例もあり、市史編さん事業が地域活動の担い手を掘り起こし、実際の活動へと橋渡しをする役割を担っている。

3. 三木市の歴史文化における市民・行政・大学協働の〈場〉としての市史編さん

以上を踏まえ、最後にこれまで三木市において形成されてきた地域歴史文化の活動をめぐる〈場〉についてまとめるとともに、今後、市史編さん事業で展望される〈場〉について述べたい。

まず、進藤報告でも示されたとおり、三木市には郷土史の会から旧玉置家文書保存会に至るまでの、地域住民が主体となった持続的な活動があったことが確認される。このことは郷土史の会設立時より事務局を務め、同会解散以降も三木市における地域歴史文化活動のコーディネーターとしての役割を担ってきた進藤氏の役割が大きいと考える。そして何よりも、こうした活動に参加し、主体的に（そして楽しみながら）続けてきた住民に

よる力が大きかったことは言うまでもない。一方でこうした活動を継続する上で重要な役割を果たしたのが、活動場所の提供を含めた行政によるサポートであったことは明記しておく必要がある。住民に最も近い場所にいる〈他者〉である行政が、その活動に一定の理解を示しサポートを行うことは、地域歴史文化の〈場〉を形成するうえで重要なファクターであると考えられる。

近年に三木市における行政の役割として特筆すべきことは、行政で陥りがちな縦割りの論理を越え、市長部局（商工観光課→旧玉置家住宅）と教育委員会（文化スポーツ振興課→市史編さん事業）とが、部局を越えた連携を行っていることである。観光振興・まちづくりを担当する商工観光課と、文化行政を担当する文化スポーツ振興課が、両者の目指すところをそのまま〈場〉に持ち込むことにより、「歴史文化を活かしたまちづくり」を掲げつつ、市民による歴史文化活動をサポートする役割を担い得るのである。また、そうした住民活動と行政との連携の輪に大学が関与することにより、大学側が蓄積してきた〈専門知〉と地域社会の側にある〈市民知〉の往還がなされ相互の活性化が図られるとともに、大学側にとっても〈学生教育の場〉として地域社会を位置づけることができるなどの効果が得られている。

以上を総合し、今後の三木市史編さん事業ではこうした市民・行政・大学の関係を維持しつつ、相互に影響し合う〈場〉を形成していくことが、「地域歴史遺産」の概念を具体化した自治体史編さんへとつながっていくものと考えている。

第2部 報告③

生野書院という〈場〉での古文書整理

井上 舞
神戸大学大学院人文学研究科

本報告は、現在生野書院（朝来市生野町）で行われている、石川家文書整理会について紹介するとともに、ここからみえる「地域歴史遺産をめぐ

る〈場〉」の問題について考えるものである。

石川家は、生野銀山町に隣接する森垣村で、薬種商や宿屋を営む商家であった。また生野代官や銀山町の有力者とも関係があり、同家には生野銀山や銀山をとりまく地域社会の諸相を知るための膨大な古文書群が残されている。しかし、その全貌は未だ明らかにされていない。

地域連携センターでは、2008年に所蔵者の依頼を受け、石川家文書の調査を開始し、主に内蔵にあった資料の調査・整理に取り組んできた。しかし2014年、それまで未調査であった外蔵から、新出の文書群が発見された。発見のきっかけは、外蔵の老朽化による屋根の崩落であった。蔵の状態から搬出には急を要し、段ボール箱にして100箱以上に及ぶ資料群は、必要最低限のクリーニングも行えないまま、仮の保管場所に置かれることになった。

このため、まずは搬出した資料について、長期保管できる環境を整える事が最重要課題となった。しかし、資料の点数が膨大なため、整理に際しては多くの時間と人手が必要となることが予想された。このため、2015年に朝来市教育委員会文化財課協力を得て、但馬県民局の助成金を申請し、同年12月に「石川家文書整理会」を発足させた。その目的は、地域にとって貴重な資料である石川家文書を、地域の方自身の手で整理してもらうことにあった。よって、できる限り多くの参加者を得るため、整理会の実施に際しては、気軽に参加できる環境づくりと、活用を意識した活動を行えるよう留意した。具体的には、次の点に留意した。

- ①実施日を毎月第2・第4火曜日に固定し、毎回の参加を強制するのではなく、都合の合うときに参加してもらう形をとった。
- ②作業内容は、古文書が読めなくてもできる、クリーニングと整理番号つけに特化した。
- ③参加者を募るための、広報と成果のアウトプットを重点的に行った。
- ④その他、興味のある資料があった場合には、各自自由に調べてもらう。初めての参加者、不慣

れな参加者は、慣れた人が側について対応する。整理に際して、参加者から出るアイデアをとりあえず試してみる。

①～④に留意して活動を行ったことにより、毎回の参加者は5～15名と流動的ながら、回を重ねるごとに目減りすることなく、継続した活動が行えている。加えて、古文書が読めなくとも参加できる形と、比較的各自が自由に活動できる場を作ったことで参加者が多様化し、石川家文書をまちづくりに活かすためのアイデアを発案できる〈場〉になったことは、大きな成果であったといえる。

また、石川家文書にかんしては、先の中島報告にもあるように、朝来市生野支所地域振興課を中心とした活用の〈場〉や、郷土史家・大学研究者・行政関係者らで結成した、石川家文書を研究する〈場〉も存在する。石川家文書整理会という〈場〉だけで全てを背負うのではなく、こうした複数の〈場〉が絡み合うことによって、石川家文書を有効に活用できる〈場〉が生み出されているといえる。

また、石川家文書整理会については、会場としている生野書院という〈場〉の存在も大きい。生野書院（朝来市役所生野支所生野資料館）は、平成4年に大正時代の民家を改築し、旧生野町が保管していた古文書や書画などを展示、保管している施設である。館内には、小規模ながら資料調査のために必要な、辞書類や郷土資料が揃っており、生野の歴史を研究するための重要拠点の一つとなっている。また、生野の歴史にかんする資料が展示しており、旧生野町の中心地に位置することから、観光目的で生野を訪れた人がよく立ち寄る施設でもある。さらに、生野書院は隣接する生野公民館（生野マインホール）にはない和室を備えていることから、茶道・陶芸・詩吟などのサークルがここを利用している。

つまり生野書院は、資料館・観光施設・地域の公民館、のように、様々な側面を持ち、様々な人に対して開かれた〈場〉であるといえる。かつ、石川家文書整理会が行われている場所は、2面が

ガラス戸になっており、作業の様子が外から訪れた人からも見やすい場所になっている。こうした、物理的にも開かれた〈場〉で、誰でも気軽に参加できる整理会という〈場〉を設けることによって、多くの人に古文書整理の様子を見てもらうことが可能になっている。もちろん、垣間見によって興味を持った方がその場で参加することも可能である。実際、観光で訪れた方が、古文書整理に参加していった例もあった。石川家文書整理会は、整理会じたいの持つ開かれた〈場〉としての性格と、生野書院という物理的に開かれた〈場〉が組み合わせることによって、さらに有効的に機能しているといえる。

このように、石川家文書は整理会をはじめとする複数の〈場〉で活用されることによって、地域に残されていた古文書群というだけでなく、地域にとっての宝、つまり〈地域歴史遺産〉になりつつあるといえよう。

整理会についても、1年間の活動を通して、成果とともに課題も見えてきた。今後さらに参加者との対話を重ね、よりよい形で継続してけるようにしていきたい。

第2部 報告④

青野原俘虜収容所研究と地域社会

—15年目の総括—

大津留 厚

神戸大学大学院人文学研究科

青野原の収容所跡を初めて訪問したのは2002年5月でした。今回の地域連携協議会での報告に「15年目の総括」と副題を付けたのは、ちょうどそれから15年目に当たると同時に、私自身が定年退職を間近に控えて、一度これまでの調査研究の総括をしなければならないと考えたからです。

しかしもともと青野原俘虜収容所の存在自体はもう少し前に認識されていました。それはまた神戸大学の地域連携事業そのものの歴史とも関係し

ていました。私が神戸大学に赴任したのは1998年でした。つまり阪神淡路大震災が発生して3年が経過していました。この震災を契機に神戸大学の日本史のスタッフを中心に被災史料の修復、保存の運動が起こりました。この運動はやがて地域の歴史遺産の活用に取り組むことになりました。私が神戸大学に赴任したのはちょうどその時期に当たっていました。それは小野市の市史編纂事業への協力と、そこで渉猟された史料の活用が図られていた時期でした。その史料の中に第一青野原で捕虜だったドイツ兵の手記がありました。その翻訳の仕事が私に回ってきました。翻訳に目途がついて、その不思議な世界を見てみたいという思いで、青野原を訪れたのが2002年5月でした。そしてそこで発見されたのが、青野原俘虜収容所建設の棟札でした。

そこから始まった青野原調査の中で、私が永年取り組んできたハプスブルク帝国の捕虜たちが青野原に収容されていたことがわかってきました。ハプスブルク帝国は多民族国家であり、したがって20世紀初頭の青野原に忽然と多民族社会が出現したことになります。それは正にハプスブルク帝国の縮図と言える世界でした。同時にこの多民族社会は青野原周辺の住民と様々な回路でつながっていることがわかってきました。

そこで私たちが取り組んだ次のステップは私たちが調査研究して判明した収容所の現実を地域の人たちに、地域連携を進める神戸大学の構成員に、さらには捕虜の故国の人たちに発信していく作業でした。しかし「発信」は決して一方通行ではなくそれを契機に情報の提供があつて少しずつ情報量が増えていくプロセスでもありました。特にウィーンでの展示会を契機に青野原で収容されていた捕虜所有の写真が提供され、今度は地元の人たちが写真の現場の特定に熱心に取り組んでいたお陰で「青野原収容所像」は非常に豊かなものになりました。

もう一つ大事なことは私のハプスブルク研究にとって青野原が持っている意味です。ハプスブルク帝国は第一次世界大戦の緒戦でロシアに大敗

し、シベリアを中心に200万人に及ぶ兵士が捕虜として抑留されていました。在中国のハプスブルク帝国公館は、東アジアに存在する自国捕虜の救援の最前線にありました。日本で収容されていた捕虜もまたその守備範囲に入っていました。したがって青野原から今度は在中国ハプスブルク帝国公館の活動が見えてきました。そこにはこれまでの国際的なハプスブルク史研究では全く見えていなかった世界が展開されていました。研究の地平線は無限に広がっています。

現在青野原収容所が存在した加西市では戦争遺跡博物館構想が進められ、青野原収容所の遺構もその中に位置づけられようとしています。神戸大学の地域連携事業もこの15年間で大きな広がりを持ってきています。また2018年はハプスブルク帝国崩壊100年の記念の年に当たり、国際的な崩壊史研究の高まりがあり、青野原もその中で大きな役割を果たそうとしています。それぞれがそれぞれの広がりの中で展開してきた「青野原」という場合は、その展開の中でまた存在感を増している、それが15年の総括と言えるでしょう。

参考資料 社会発信

2005年、小野市と神戸大学の間で連携事業を進める包括協定締結

青野原収容所に関する調査研究の成果を示す展示会

展示会に合わせて、当時の演奏会のチラシに基づいて、捕虜たちが演奏した曲目を神戸大学交響楽団有志が再現

2006年、神戸大学で展示会、演奏会を開催し、大学内で地域連携事業の成果を示す。

2008年、小野市の全面的協力を得て、捕虜たちの故国の一つであるオーストリアの国家文書館で展示会を開催。神戸大学交響楽団有志による捕虜の演奏会の再演が国家文書館と軍事史博物館で行われた。

ドイツの一市民から青野原で捕虜だった人の遺族から入手した300枚ほどの写真が提供される。

2009 年、東京で展示会。11 月 11 日から 21 日までの日程で在日オーストリア大使館内の展示場で開催。それに先立ち、11 月 7 日に東京青山にあるドイツ文化会館で講演会・演奏会。習志野の市民グループが習志野収容所で演奏された音楽を再演。

2011 年、小野市で展示会と演奏会。このころから捕虜収容所の敷地がある加西市の郷土資料室が精力的に調査を始めることになり、ドイツ市民から提供された写真が写された場所を特定する作業が急速に進展。

2012 年、加西市図書館で展示会。

2014 年、第一次世界大戦開戦 100 年を記念して、オーストリア大使館との連携による展示会、演劇、演奏会を神戸大学で開催。

2015 年、加西市が捕虜収容所開設 100 周年を記念して講演会、サッカー試合の再現などを行う。東京のフランス国際学園で展示会、講演会

2016 年、京都のフランス国際学園で展示会、講演会
加西市、記念碑の設置、捕虜の手記の日本語訳の出版に向けて準備を進める。
奈良県立図書館で展示会、説明会

主要参考文献

大津留厚「収容所を生きる」山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史編『第一次世界大戦 第2巻 総力戦』（岩波書店、2014 年）。
大津留厚『捕虜が働くとき—第一次世界大戦・総力戦の狭間で』（人文書院、2013 年）。
大津留厚、奥村弘、長野順子『捕虜として姫路・青野原を生きる 1914-1919—箱庭の国際社会』（神戸新聞総合出版センター、2011 年）。
大津留厚ほか著『青野原俘虜収容所の世界—第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』（山川出版社、2007 年）。

全体討論

司会（前田結城・神戸大学大学院人文学研究科学術研究員）

それでは討論に入りたいと思います。

まず、質問用紙がフロアからきておりますので、それについてのご回答をお願いいたします。まず石野さんへ、兵庫県立歴史博物館の藪田さんから質問です。「石野さんの報告について二つ質問します。すぐにモノを入手できない環境にある栄村廣瀬家の土蔵にある民具や生活什器、古文書用の和紙などはどこから入手したのでしょうか。判明していることを教えてください。」二つ目。「漆器を包む反故紙を丁寧に整理されたのは素晴らしいことだと思いますが、反故紙のどんな情報を記録しておられますか」。以上二つの質問について、石野さんお願いいたします。

石野律子（地域史料保全有志の会）

土蔵にあった膳椀などの入手先ですけれども、だいたい箱書の墨書に書かれておりまして、輪島塗がかなり多いですね。栄村では個人がそうした箱を持っていまして、廣瀬家に限らずたくさんそろえているようです。で、調べてみますと輪島が「椀講」というシステムを売り出して、少しずつお金をもちよって、今年はある家の家、来年はある家の家ということでそれぞれ集めていたようです。それから福島県の喜多方漆器もありました。あと、糸魚川のほうの漆器などもあるかもしれませんが、よく分かっていない部分もあります。栄村は新潟県に近いので川の輸送が多かったと言われています。焼き物については、ざっとみたところ、ハレのものと、やはり有田焼とか九谷焼が入っているのは分かっていますし、日常のものと瀬戸のものがかなりみられます。あと、反故紙ですが、白水智さんが神奈川大学の日本常民文化研究所のほうで奥能登の時国家の調査などを

された時に作られた「古文書袋」というのがあります。チェック項目がたくさんあるんですね。様式とか形式といった古文書の「形」も記録できるんです。あと、保護紙は一つの箱から何枚も出てきて、年代やちょっとした名前が分かるものは記録しています。ただまだ全部は終わっていない状況です。

司会

戴田さんよろしかったでしょうか。つぎに滋賀大学の青柳周一さんからの質問です。「こらっせ」で保管している古文書・民具は何点ですか。廣瀬家土蔵復元スペース以外に専用の場所を設けて保存しているのでしょうか。また、「人の目通し」と「風通し」による保存ということで特に気を配っていることはありますか。いかがでしょうか。

石野

資料の数ですが、古文書のほうは、ありすぎてまだ全貌が確かめられておりません。よく小学生の子供たちから「筆筒の引き出しに何枚入っているんだろう」と白水さんがよく質問されるんですけども、子供たちが「何十枚かなあ」というと、「一つの引き出しで四千枚でてくるんだよ」という話をよくされているので、全部で何枚になるのか点数はよく分かりません。

民具のほうは、被災後に集めた資料とそれ以前に小学校で集めていた資料の二つがあります。もともと村で集められていたものが約千点ありました。被災後に私たちがレスキューして集めたものは今のところ五千点ほどになります。それだけのものを教室4室分のスペースには全くに入りきれないので、展示できなかった民具のほうはもちろん多いです。車で10分くらい離れた廃園になった保育園に入れていただいております。

あと、「人の目通し」と「風通し」についてですが、新しく資料館を建てるというと温度・湿度管理、しっかりした空調設備を調えることを普通は考えます。ただし、もともと民具は普通の生活で使っていたものですし、白水さんは古文書につ

いても、もとは筆筒の引き出しや箱に保管されていたものであり、人が出入りする環境でも保管は可能なのではないかと考えているようです。設備投資にはすごくお金もかかりますし、こういった事情から、私たちは「人の目通し」と「風通し」という方法をとっています。ただその場合でも、資料館を建てる前には1階・2階に相当する場所では温度・湿度のチェックはしました。保育園に移管する際もしっかり温度・湿度チェックはしました。あと、害虫についても東村山の考古の方がトラップを何箇所かに仕掛けて専門的に調査してくださいました。資料も施設移動する際に燻蒸しました。もちろん、人の出入りがあれば虫が入ってきてしまうことは村の方からも指摘を受けています。もとは学校なので窓も多いんですね。暗幕をすると展示はみてもらえないので、できるだけ日が差す部分には窓にカバーをかけるなどの努力はしています。

司会

ありがとうございます。もう一点佐藤大介さんからご質問が出ています。「観光客・営利目的の企画を行わない理由は何故か」、ということです。

石野

予稿集にも答えを書いていませんでしたね。実は「こらっせ」はできたばかりなので、パンフレットやポスターによる広報・宣伝も考えたのですが、栄村のほうとしては、まずは自分たちが施設についてよく知らなければ、人が来ても案内ができないと。展示品の内、自分たちが使っているものもありますが、先代たちが使っていたものもありますし、展示されている古文書についても解説はできないので、もう少し勉強する時間が欲しいと。なので、すぐの広報・宣伝は止めてほしいということでした。今は村の人たちのためにオープンしてしまして、そこを観光拠点にして観光客がたくさん押し寄せてきても逆に困るということで、あまり広報・宣伝については積極的でないようです。私たちはもっと広報・宣伝してもよいの

に、と考えていますが、村の人たちは控え目とい
いますか、まずは自分たちが楽しんで活用してか
らみんなに来てもらいたい、というのがあるみた
いですね。ですので、営利目的で人を呼んでお金
をとることは全くやっていません。入館料も無料
です。ただ、口コミといいますが、例えば今日の
私の話を聞いて栄村に来てくださるというのは大
歓迎なんです。ただ、何気なくといいますが、意
味なくといいますが、そういうので来られては
ちょっと困るんですね。施設もあまり大きくない
ですし、自分たちが管理できる範囲も限られてい
ます。栄村には展示物に触ってはダメというもの
もなく、漆器なんかも持っていこうと思えば持つ
て行けるような状態です。ですから、やはり何か
目的を持って来る人に来てもらいたい、という意
向が栄村としてはあるみたいですね。

司会

ありがとうございます。地域の人びとにとつて
の公共性や透明性の高さという問題ですが、先ほ
どの井上さんからの生野の報告とも通じるものが
あります。対外的にどう発信するかという部分で、
地域の人びとの意向・身の丈を考えながらやって
いるということですね。

つぎに、川内報告について姫路大学の松下正和
さんより質問をいただいております。「大学と地
域社会との「知の往還」の具体的内容について。
市民と行政の取り組みはよく分かったのですが、
大学としての役割をどのように考えていますか」。
という質問です。松下さん、補足などございま
すか。

松下正和（姫路大学教育学部人文学・人権教育研
究所）

史料ネットの川内さんはよく存知あげているの
ですが、神戸大学の川内さんについてはよく存知
あげないので質問させていただきました。配布レ
ジュメにあります、大学と市民との間にある矢印、
あるいは大学や行政との間に矢印が描かれていま
すけれども、これの具体的中身についてですね、

川内さんがこの間の職務の中で感じられたことを
教えていただければと思います。

川内淳史（神戸大学大学院人文学研究科特命講師）

ありがとうございます。具体的な事例でお答え
したいと思います。地域の歴史調査に市民の方と
一緒に入ったりしますと、史料の読解や内容把握
については歴史学の専門的立場からできます。今
年度の市史の史料調査の中で三木市の区有文書を
整理した際にも、ある二つの村の間でポンプをめ
ぐって大きな争いがあったことを確認することが
できました。ポンプによる取水量や維持費用をめ
ぐる問題です。ところが、そのポンプはどこに設
置されたのか、ということになるとですね、図面
資料は残っているもののよく分からないんです
ね。そこで地元の方に聞いてみますと、「あそこ
じゃないのかな」という話がでてきて、調べてみ
ますと実際そこにあったことが分かりました。史
料を読み解き、それを地域社会の歴史として描こ
うとした時に、史料からは分からないことが地元
の記憶として残っている。こうしたことは、松下
さんも含め多くの方が経験されたことだと思いま
す。そういった記憶は、市史編纂で三木市の歴史
を描いてゆく際には大変重要な情報になってきま
すし、史料を読んでいるだけでは分からないこと
です。これが、私が経験した「知の往還」の実例
の一つです。

あと、三木市といえますとやはり「金物の町」
ということで、これまで研究されてきました。た
だ、実は近世においては「金物」の他に「染め型紙」
が大変盛んな場所だったんですね。現在ではほと
んど知られておりませんし、「染め型紙」をつくっ
ていた家でも、そのつくり方を忘れてしまってい
る状況なんです。三木に「型屋」が十数軒あった
ことは、進藤さんたちが読んだ古文書に記載され
ています。こうした中で、三木市内に個人がオー
ナーを務める「三木の型紙」の保存展示を行うギャ
ラリーがありまして、市民活動によって三木の歴
史の一側面が今に伝えられています。また、玉置
家住宅で行われている市民ボランティアによる襖

の下張り文書剥離作業によって、三木でつくられた「染め型紙」が実際にでてきた。こうした市民活動を通して、近世の三木の産業として「金物」と同時に「染め型紙」も重視しなければならないということが、私たち歴史を描く側の認識として入ってくる。市民活動の中で得られた歴史情報が、歴史学の専門家の認識を変えていく。こういった事例もあります。

また、行政と大学との関係に絡めて言いますと、どういった市史をつくれればよいか、ということではいろいろな意見がぶつかり議論になります。こうした中に、今日お話ししたような市民の側での活動成果が「知の往還」を通じて加わり、三者協働の〈場〉としての自治体史編さんができてくる。行政や大学側から一方的に「こうした市史をつくりたい」ではうまくいかない。自治体史編さん事業は大学の専門知と行政や市民の社会知の「ぶつかりあい」や「往還」の中でできてくる。このようなことを考えています。

司会

ありがとうございます。今の回答でよろしかったでしょうか。つぎに、佐藤さんから進藤さんへの質問です。「やりがいだけで続けるのは大変ではないですか」。いかがでしょう。佐藤さん、何か補足はございますか。

佐藤大介（青葉山古文書の会）

佐藤と申します。質問の趣旨は、非常に生々しい話をする、サラリーを欲しいと思ったことはないのか、ということです。というのは、ボランティアとして参加して史料整理をするという形式は広がっていると思うのですが、やっぱり短期間では終わらなくて数年に及ぶ仕事になると思います。こういう質問をするのは、新潟県長岡市で一昨年の暮れに市民ボランティア整理の10周年の集会があった時に、市民の方からそういう質問がでたんですね。長岡の図書館で無報酬ですという話をしたら、その人が怒りだして、「こんな大事な仕事になんで報酬がでないんだ」と。私も仕事

をお願いする側にあるので、いつも悩むんですね。ちゃんとそうした補償をしないと仕事を頼んではいけないのではないかと。仕事を「する側」の進藤さんからも意見を聞きたいですし、あわせて「頼む側」の神戸大学の川内さんや井上さんからも考えを伺いたいです。

司会

いかがでしょうか。

進藤輝司（三木古文書研究会）

『三木市有宝蔵文書』の翻刻出版活動を10年間やってきましたが、これは市との契約で、1ページにつき何円というお金をもらっています。年間で600頁程の本を1冊出しますと何十万か委託料ということで還ってきます。それを参加者に等分しています。ですので、一応ボランティア活動としてはやりながら、報酬ではないですが、1ページにつき何円という契約をしておりますので、足代といえますか、市からいただいた分を参加者それぞれの日数で計算して渡すようにしてきました。全く無料ということではなく、1ページにつき何円という形の中で10年間やってきました。ただ私を例にしても年間で2〜3万かな。週2日木曜日と金曜日の昼1時から4時まで3時間ずつ10年間やりましたけれども。ずっと参加者が分かるよう日誌をつけていますので、1年に1回、委託料をそれに準じて配分して続けてまいりました。あと今日報告した中で、月1回「三木古文書塾」をやっておりますが、1回参加するごとに参加者から500円、ワンコインですね。1回500円いただいております。三木市観光協会が集めて、私ら5人の講師に3ヶ月か4ヶ月に1回ほどちょっとだけ配分してもらっています。今は古文書塾に14〜5名来られています。20名を募集しておりますが、途中でやめる方もいますし、そんなに大きな金額にはなりません。

司会

ということですが、佐藤さんいかがでしょう。

佐藤

状況はよく分かりました。ありがとうございます。

司会

あとお一方ですね、佐用郡地域史研究会の竹本敬市さんから「今後のこととして、地域に生きた人に焦点をあてた視点でのまとめ方、例えば大字誌が多くのところでもまとめられて最近注目されていますが、大字誌を読んだ感想などを語り合うような会を催してほしい」ということです。ご要望のようなものですが、どういった経緯でこのようなことを考えられたのかなど、何か補足があれば竹本さんお願いいたします。

竹本敬市（佐用郡地域史研究会）

竹本です。地域史研究会のほうで、襖の下張りとか自治会の史料を解読したりしています。現在、多くのところで大字誌がまとめられている状況です。それから、大学のほうも大字誌を編さんするにあたっていろいろと協力されていると思います。先ほどの報告の中でも「地域に生きた人に焦点をあてる」という視点で話をされていたと思います。今までの市史や町史は為政者を中心にしたものが多いという中で、大字誌がどのような史料をもとにしてまとめられているのか、そうしたことを聞きたくて質問させていただきました。

司会

私の関わった事例ですと、丹波市の棚原地区の大字誌では、原始・古代から現代までの政治の流れを中心とした、いわゆる「通史」というものは、史料の残存状況からして描くことができません。残っている史料の性格にあわせて、なるべく史料のおもしろさを知っていただくことをメインにしてまとめました。例えば、大正時代の村長さんが古文書を貼っていつてつくられた立派に装幀された巻物が残されています。その村長さんは、「何が書いてあるか分からないけれども、後世の人が

読み解いてくれるはずだ」という前書をその巻物に記していました。それで、私たちが読み解いてみると、「新しいお嫁さんが他の村からやってくると、うちの村の若者が石を投げつける風習があるがそれはやめろ」とかですね、「ある村人が酒乱につき藩の奉行所の白洲でお裁きを受けた」とかですね、普通の自治体史ではまず取りあげられないことがたくさん書かれているんです。身に迫ると歴史といいますか、そういったものを中心に史料を読み解いていくプロセスとあわせて書き込む形でまとめたのが丹波市の棚原の事例です。

奥村弘（神戸大学地域連携推進室長）

香寺では自治体史が完成してから字誌をつくる作業があり、現在4つの所で字誌ができています。それをさらに広げるということで、一週間程前に議論する会があり参加してきました。全体として字誌をつくりたいという要望はかなりあります。前田さんのお話にもありましたが、いわゆる自治体史と同じようにつくろうとすると失敗するわけで、地域ごと・村ごとの特質に合わせてつくることが大事です。さらに一回つくって終わりではなく、さらに補填したり増補したりする必要性なども議論されました。来年度以降の課題となりますが、実際につくられた方、これからつくろうとする方の交流や、大学の研究者や他の市民が字誌を読んだ感想を語り合う〈場〉を、竹本さんからの提起も含めて考えていきたいと思っています。

司会

最後になりますが、桜井三枝子さんからの質問になります。「保存対象にフィルム（映像・動画・静止画）の保存・整理は入らないのですか」。続けて、「兵庫県以外にこのような活動をしている県はありますか」。ということです。フィルムの保存の問題ですが、これはパネラーではなくフロアの方にお答えいただいたほうがよいでしょう。松下さんお願いいたします。

松下

保存・整理の対象からわざとはずす、ということはないと思います。劣化のスピードも早いので、残していこうという動きはあります。

司会

ありがとうございます。「兵庫県以外にこのような活動をしている県はありますか」ということですが、仙台の佐藤さんお願いいたします。

佐藤

神戸での歴史資料保存の活動は、1995 年阪神淡路大震災をきっかけとしていまして、神戸大学や兵庫県の関係者の皆さんから学んで宮城県では 2003 年から活動しています。神戸では多くの市民の皆さんが参加しており、うらやましく思う部分もあり、目指すべきものと考えています。話は前後しますが、フィルムについては宮城でも持ち込まれたことがあります。昭和 7 年に宮城県沿岸の亘理町に荒浜という集落があるのですが、そこを映したフィルムが東日本大震災をきっかけにでてきたものです。フィルムというのは家族を映したものが多いのですが、当然時間が経てば歴史資料になります。ただ、フィルムは劣化する問題があります。デジタルにするしかないのですが、一遍にはできないので保存をどうするのか、ということ宮城では研究をしています。何か成果が出ましたら機会を設けて報告したいと思っています。

司会

ありがとうございます。では、滋賀からお越しの青柳さんいかがでしょうか。

青柳周一（滋賀大学経済学部）

フィルムに関しては、滋賀県の商家の伊藤忠兵衛家から、戦前の家や会社の行事を撮影したものをいくらかお預かりしています。劣化が進んでいるので、程度の軽いものについては業者さんに頼んでいくらか処置をして見える程度の状況に修復することはできました。一方で、劣化の激しいも

のも多く、技術的に修復の難しいものもあります。ただ、それらについては地元の方々に見てもらえると、恐らく映っているのは誰かなど、いろんな情報が得られるのではないかと考えています。地域に調査成果なりを還元していく時に、フィルム資料は積極的に見ていくべきものだと思います。仙台での技術開発の成果を期待しています。

司会

川内さんから一つ補足があるようです。

川内

フィルムの問題に直接には関係しませんが、いわゆる古いものだけではなく、我々がごくごく最近使っている、将来的に歴史資料になるようなものも保存していくべきと考えています。神戸大学では、阪神淡路大震災以降、被災状況の中での人びとの活動からでてくる、避難所のビラとか生活用品の保存という取り組みをずっと続けてきました。それらは震災資料とか災害資料と呼ばれています。地域の現在の生活を未来につなぐために、身近なものも保存対象として考えておく必要があると思います。

司会

ありがとうございます。地域資料の裾野は思ったよりもずっとずっと広いです。残す残さないの線引きの議論も含め、今後も引き続き考えていきたい問題です。さて、最後にパネラーの方々全員に本日の感想や言い足りなかったことなど、何でも結構ですので一言ずつ頂戴したいと思います。

川内

今日はどうもありがとうございました。先ほどの佐藤さんからの質問と絡めてお話ししますと、進藤さんは「お金をもらってます」とおっしゃっていましたが、足代程度ですし、いろいろお願いする中で心苦しい部分もあります。ついついボランティアを下請的なものと考えがちになってしまっていますが、そうではなく一緒にやっている

取り組みであり、将来に残る仕事の一環であることを大学なり行政なりが、もっと示していかなければなりません。そうすることで、進藤さんのおっしゃったような「生きがい」という思いを活動に対して抱いていただければ幸いです。本日報告しましたように、市民の皆さんの活動・協力がなければ新しい市史はできないと考えています。今後もしろいろなご忠告をいただきながら一緒に取り組んでいきたいと思っています。

進藤

先ほど『三木市有宝蔵文書』のことで、1 頁につき何円というお話をしましたけれども、「三木郷土史の会」を 26 年間やってきて『三木史談』を 51 巻まで出しました。そこでは、お互い原稿を書いても写真を撮っても一切会からはお金はもらっておりません。一銭の報酬もなく、全くのボランティアで 26 年間編集してきました。「宝蔵文書」あるいは「大庄屋文書」（『累年覚書集要 明石藩三木郡小川組大庄屋安福家七代の記録』）など市と契約した分については、いくらか契約料をいただきましたけれども、26 年間続けてきた「三木郷土史の会」は全くのボランティア活動です。

私は昭和 53 年ごろ現職の三木市役所の職員でしたので、土曜日曜に「三木郷土史の会」に関わりましたし、現職を辞めた後も元三木市職員の横山^{ひろむ}弘と二人で裏方として支えてきました。ボランティア精神でお金のこと関係なしに、地域の歴史資料をなんとか残したいということで、郷土史に関係のある新聞の切り抜きも昭和 27・28 年頃から六十何年間つづけてきて、先だってみき歴史資料館へ寄贈しました。スクラップブック A4 版で 150 冊。皆さんがやられないことをやろうと思って頑張ってきました。

石野

私もずっとボランティアで栄村に入っているわけですが、先ほどの佐藤さんからの質問のように、他の方から報酬について言われたりするんで

すね。私は別のところで同じ仕事をして報酬をもらって、でも栄村では全然もらわずにやっている。ボランティアをやってみたら分かることってたくさんありまして、実はお金をもらう仕事より、ボランティアで着々と何かを積み重ねていくことのほうがどんなに楽しいというか、後味がいいというか、そういうものがあります。毎月毎月仕事をしながら栄村に行って、お金を落としてくるわけですが、最初は大変でしたが、さすがにいい気持ちで帰ってこられるんですね。「疲れた～」と言ってみんなでぐったりしながら新幹線に乗って帰ってくるんですが、家に着くとスッキリしています。やはりお金では買えない体験なんだと思います。委託で民具調査なんかをしますと、1 年目はここまで、2 年目はここまで、3 年目に報告書を出してはい終わり、ということが多いですね。でも、栄村の場合は期限がなく、私自身の知識も活かせるし、他の参加者もみんなそうなんです。古文書読める人はそれを活かして、古文書とか歴史に関係ない人でも例えば大工さんだったら、民具の修理を手伝ってもらったり、年配の方でしたら体験にもとづく知恵とか工夫とかを教えていただいたり、栄村は一人一人がバラバラに集まってくるんですが、「この人いてくれて良かった！」ということがたくさんありました。その積み重ねによって一つの資料館ができたんだと思います。今日は長いこと活動が続けられているの進藤さんのお話を伺っていて、82 歳まで私はできるかなと思いつながら、すごく勇気をいただきました。ありがとうございました。

井上

私も佐藤さんの質問に絡めてお話をしたいと思っています。実は「石川家文書」は一時、助成金を受けまして、地域の方 2 名を雇用して写真撮影の作業を行っていた時期がありました。ところが、助成金には期限がありますので、それが切れた途端、全く何にも進まなくなってしまったんですね。何もできないまま、「お金の切れ目が研究の切れ目だよ」みたいな話をずっとしていました。その

後も何度か単発的にボランティアによる整理会をやって、日程や人を集める問題など失敗と挫折を繰り返した挙げ句に辿り着いたのが、今やっている整理会のあり方なんです。非常にいい形で進んでいます。それは多分「石川家文書」のもつ魅力と、集まってくださる方々の日程がうまくかみ合っているからだと思います。というのも、実は朝来市ではもう一つ「山田家文書」の整理会をやっているのですが、こちらは「石川家文書」の整理会と同様の形式でやっているにもかかわらず、人が集まらない。恐らく何らかの要素がうまくかみ合っていないから人が集まらないんだと思います。ですので、成功例に固執せずに地域に合わせて整理会をやっていく必要があると考えます。そのためには、我々自身がそうした経験を蓄積して、この地域ではこうしたやり方がいいのではないかな、この資料だったらこんなことができるんじゃないかな、といったアイデアを提示していくのが地域連携センターの仕事の一つではないかなと思っています。

中島雄二（朝来市役所生野支所地域振興課）

今日はボランティアで地域の古文書整理などをされている方のお話などを聞いていまして、非常に敬意を表する次第です。生野町でも「生野古文書教室」というものがありまして、16名の方が参加してコツコツと勉強されています。この活動には非常に頭の下がる思いです。

全く別のことになりますが、他の4町と合併した生野町は高齢化率が一番高く、65歳以上が占める人口の割合はほぼ4割に達してきておりまして、鬼気迫る状況になってきました。報告でも申し上げましたが、今後地域資料をどのように保存・管理していくかという問題が眼前に迫っております。地域資料を保存・継承していく〈場〉としては生野書院がいいのかなと思いますが、他の地域で実践されている歴史資料の継承の問題について、機会がありましたらぜひ教えていただきたいと思います。ありがとうございました。

伊藤導三（氷上古文書同好会代表世話人）

私の地区での取り組みはまだ3年です。よその活動のお話を聞きますと何十年という取り組みがあるようですので、まだまだこれからだかと考えております。食事代なんかは女性の会員が8名いますので、材料はこちらでお金を出して買って、みんなで分け合いながらボランティアでやっております。これからも続けていかなければと思っています。

大津留厚（神戸大学人文学研究科）

私は違った関係から地域連携活動に参加していますが、西洋史というのは「アームチェア学問」みたいな面があります。青野原の研究をする中で、地域の方とのふれあいの中で写真の撮影場所を特定する作業は本当に熱心にやっていただきました。「世界史未履修問題」があつてからは、世界史をどういう風に考えれば良いのかという議論があり、その中で「地域の中の世界史」が一つの方法論として注目されています。青野ヶ原も結果的にはその先駆的な例となりました。2、3年前にはセンター試験で青野原が出るという考えられないこともありました。これも皆さんのご協力の賜物だと感謝しております。

司会

もっと多くの方からご意見を伺いたかったのですが、時間も押してきておりますので、今回のテーマ設定に深く関わった木村さんと奥村さんに総括してもらい、しめさせていただきます。

木村修二（神戸大学人文学研究科）

今回は〈場〉という問題を一つキーワードにしまして、そこから生み出される論点は何か、ということで出発したわけです。基本的には報告者の皆さんに助けていただく形で、ここまでくることができました。全体討論で議論が煮詰まった場合に備えて、いくつか私のほうで論点を出しておきましたが、「成功」に見えるそれぞれの活動の中に、実はそれなりの「失敗（つまづき）」はなかった

か。その「失敗（つまづき）」というのは、地元熱の低下、リーダーの不在・食傷（マンネリ・飽き）という問題であり、そこから派生する「活動の停滞」はあったのか、なかったのか。私の経験からはこういったことが想定されましたので、論点にしようとしたわけです。

その後、「寛容と分担」という言葉をレジюмеに書きましたが、井上さんの報告にあった生野書院での活動や、石野さんの報告にありました、栄村の人びとがさまざまな人を受け容れていくという素地。そこには「誰でも受け容れる」という大きな寛容さがあって、それを可能にするコーディネート的存在の重要性などが確認できたと思っております。

先ほど奥村さんから「大字誌」の問題を来年度以降にやりたいとありましたが、私が今回十分に提示することができなかった問題や〈活動の持続性〉の問題についても今後の地域連携協議会で議論できればと思います。

奥村

今回は〈場〉の問題を議論しましたが、〈場〉をつくるには、相当な努力が必要であることは各報告からお分かりいただけたと思います。それは自然にはできません。地域ごとの長い間の積み重ねの中からでてくるわけですね。地域の個々人の努力によってできあがる。こうしたことが前提にないと、そもそも〈場〉は出てこないのです。では、この前提をいかに強め・支えていくのか。これが求められている課題なのではないかと思えます。「支える」という点では、大学というのは社会全体の専門知を高めていく機能を有していますが、日常的にはなかなか気づいてもらえません。青野原に関しても、ここに大津留先生がおられたことが大事なんですね。私はドイツ語が読めないもので、もしもおられなかったら青野原から資料がいくらでてきても、「まあ、頑張ってください」で終わってしまう。大学におけるそれぞれの学問分野での深さが前提にないと、地域の方々が重要視するものの理解は深まらないという関係がある

のです。逆に、大学のほうも独りよがりになって伝える努力を怠り、外との関係を利用して〈知〉を深めていかなければ、青野原のような事例は生まれてこないでしょう。

各地で大字誌の編さんが始まるなど、地域の方々が大きく動き始めている中で、専門家はどのように要請されてくるのかが問われています。また、行政の方々もその動きを支えるような新たな自治体づくりをどのように進めるかという、ハードをつくるだけではなくソフトにも対応できる職員が求められています。神戸大学の文学部からも地元の自治体に就職する学生がおり、こういった活動を仕事として捉えてやっております。そういうわけで、お互いに支え合うことと、支え合うために大事なことは何かということ、今後も発信し続けていく必要があると思います。またじっくりと議論ができればと思っておりますので、今後もしよろしく願いいたします。以上です。